

4. 各時代の重要場面“このエピソード”で楽しく覚える！

⑥ 武家政治―重要場面のエピソード

村上浩一

各時代の項目順から類推して、ここでは「武士の起こり」というテーマで書いていくことにする。

一、「私腹を肥やす国司」

「尾張国郡司百姓等解文」という10世紀末の古文書によると、中央政府から地方へ赴任した国司を農民が訴えたというのです。理由はというと、要するに国司が私腹を肥やすというのです。例えば、税を高くとったり、税の未納分に多くの貸し付けをして、利息をかすめ取ったりするわけです。他にも、その国司の従者である郎党までもが私

腹を肥やすというのです。その解文は

㊦箇条にもおよびます。その国司とは

藤原元命という者で、結局は郡司や百姓らによって解任させられたようです。

988年のことです。

一方、『今昔物語集』によると、国司の貪欲さがわかる話があるのですよ。

信濃の国司、藤原陳忠は任期満了に伴い都へ上る途中、人馬もろとも橋から落ちてしまいます。陳忠は運よく途中の枝にかかり助かりました。一方の手には縄を、もう一方の手にはヒラタケを持っていたそうです。そして、助けられた国司は郎党らに言ったそうです。

「実は大損をした、まだたくさんあったのに。」と。「本当に大損でしたな。」

と笑う郎党らに、「馬鹿を言うな。国司は倒れても土をつかんで立ち上がれないではないか。」と言って笑ったというように語り伝えてあります。

このように、国司の貪欲さからでしょうか、10世紀末から11世紀初頭には多くの国司が訴えられているようです。こうして、地方政治が乱れていたのです。地方では、治安維持あるいは郡司や地方豪族たちの自衛手段として、その子弟に武芸を磨かせ、次第に彼らが「武士」として起こっていつ

たのでした。

二、弓矢の習い

その武士が最も意識していたのが「弓矢の道」「兵の道」というものでした。いろいろな絵巻物にも、武士たちが「弓矢取る身の習い」として、常日頃から訓練をしていました。例えば、「犬追物」といって、犬を放して墓目の（鏃をつけていないので傷をつけない）矢で犬を射る練習がありました。又、「笠懸」といって、塚（的の背後に築いた山形の土）に笠をかけて遠くから矢を射る練習もありました。

ここに武士道の源流があるわけです。『宇治拾遺物語』によると、こんな逸話が残っていますよ。壱岐守宗行のある郎党が、訳あって新羅の国へ渡りま

その男は「弓矢に携わる者」の一人として、虎退治を請け負い、わが命を捨てて虎と直面します。そして、鏃のよ

子どもたちに自由に歴史を語らせるという方法もいいのではないかと考える。例えば、『一遍聖絵』には、「筑前の武士の家」という場面があるが、ここには主殿、離れ、馬小屋、門、板と竹による塀、武士の姿等々が描かれている。しかも、主殿ではさも聞こえてくるか

このように、武士たちは、日々武芸を鍛え、主君のためには我が身も捨てて鍛練していたのでした。さらには、忠節、武勇、信義、礼節、質実、孝行等々の道徳心が「弓矢取る身の習い」として形成されていきました。

三、エピソードを創る？

以上、子どもに語る口調で、実際に残された説話集等からエピソードを紹介してみた。

ところで、この時代にはたくさんのお絵巻物が残されている。これを見せて、

膨らませていくことで、歴史の場面が理解されていくのではないかと考える。（熊本市出水Ⅱ出水南小学校教諭）